

遙かなる風雪

⑬

実録・柴田音吉洋服店

国際人として —— 第2の故国フランス

何事につけても精力の限りトコトンまでやらなければ気のすまなかった彼は、家庭でも精一杯の愛情を家族にそそぎこんだ。

長女菫子(大正7年生)が幼稚園に通い出すと踏切りを渡るのが心配で仕方がない。到々踏切りの下にトンネルを作るという発想に至り大まじめでこれの実現を図ったが、電鉄会社との折衝で不可能。通園の期間を通じて彼の心配は続く。

庭に面した二階の窓は観音開きになっていて、鍵をかけていないと幼な子の手でもパッと開く。これがまた音吉の心配の種のひとつだった。

彼は昭和3年に生れた次男の現植三専務がまだ3才になるかならぬとき、何度も何度もこの戸を開けさせ、「こうしたらこう落ちるから危ないよ」といいきかせた。反復暗示の効果も彼をもって生れた頭の良さで会得していたらしく、こうした教育法で子供たちにあらゆることを叩きこんだ。

外国人の客の多いこの家庭では、英語もまた子供たちの必須科目である。まだ口のまわらない次男をつかまえて、音吉は「ハウ・ドウ・ユー・ドウ」をいわせようと思案した。

彼が考えたのは「ハウ」というとき、赤ん坊がはうあの真似をすることだった。こういった奇想天外な教育のおかげで子供たちは日常の片言の英語が多少ともわかるようになっていった。



フランス人の客を大勢迎え兩國国旗を交差して破顔する二代目音吉

音吉は英語も一通り話せたがむしろフランス語が得意でフランス人たちが「柴田は半分日本人で半分フランス人だ」といったほど。しかし子供たちに手をとって教えたのは普遍性のある英語だったようだ。

× ×

教育するだけでなく、子供たちにとってはよく遊んでくれる父親でもあった。

「優しい、いい父だった」と現高明社長も植三専務も述べ懐する。豪華なヨットでの船遊びや、汽車に乗ってのあちこちへの旅行に、彼は家族を伴ない、心ゆくまで遊ばせた。

栗水海岸の家を別荘として残し諏訪山の邸に一家が移ったのは昭和のはじめである。

洋館、和室ともにそなえたこの豪華な邸には絶えず客が出入し、10人近い使用人はその接待を日常事とした。

客好き、賑やかなことが大好きな音吉は神戸にフランスの軍艦が入ったりすると、士官を大勢呼んで円遊会を開く。アトラクションにコマ回しまで呼んで、子供のようにはしゃいだ。(現在この諏訪

山の邸は歯科医師会館になっている。柴田家は戦時中は栗水海岸の別荘に住み、その後芦屋の現在の邸に移った)。

× ×

フランスの海軍士官を呼ぶほど2代目音吉がフランスびいきになったのは、もちろんルバー市の国立工芸学校織物科に在学していた青春の思い出のためであつたろう。

第2の故国として日仏親善に早くから力をつくし、大正15年4月には神戸日仏協会副会長に当選、昭和7年12月にはその会長に就任した。昭和2年11月、親善の功によってフランス政府からオフィシェ・ド・ランストリクシオン・ビュブリック勲章を、また昭和8年2月には同政府からコマンドール・デュ・ドラゴン・ダンナン勲三等の勲章を授与された。

フランスだけでなく、昭和4年5月にはパラグワイ共和国名誉領事に任命された。

当時としては数少ない実力をともなった国際人のひとりであった。

(写真の賞状には次の文字が見える。「フランス文部省・ルバー国立工芸学校・賞状・ルバー国立工芸学校長は文部大臣に代り島山忠氏(神戸・1886年2月25日生れ)が1911年から12年の間織物コースの第1学年の学年末コンクールで3等賞を得られたことを証明する・1912年7月28日ルバーにて・学校長署名」島山忠は先述のように音吉の婚前の名である)。(つづく)

岡 和子記者



ルバー国立工芸学校在学当時フランス文部省から授与されたコンクールの賞状。このほか卒業の際には優等賞ももらった